

# 学び身近な自然から

## ノーベル化学賞 白川氏ら弘大で講演



講演で「自然は身近にどこにでもある」と述べる白川名誉教授



昆虫の生息環境を例に「素晴らしい環境を保全することにつなげたい」と述べる吉澤准教授

弘前大学は4日、白神山地が12月に世界自然遺産登録30周年を迎えるのを記念し、弘前市文京町の同大創立50周年記念会館で講演会を開いた。2000年にノーベル化学賞を受賞した筑波大学の白川英樹名誉教授が「自然に学ぶ」、17年にイグ・ノーベル賞(生物学賞)



を受賞した北海道大学大学院農学研究院の吉澤和徳准教授が「昆虫少年が性の一般常識を覆すまで」と題して講演。身近な自然から学ぶことの大切さや、常識に反する進化を遂げた昆虫を例に生息環境を保全することの重要性を説いた。

(石田紅子) 白川名誉教授は縄文人が残した土器や土偶、欧州の原始人が描いた洞窟壁画を例に「人間が自然をよく学んで描いたり、作ったりしたことが分かる」と強調。自身が開催してきた子ども対象の自然教室での体験を紹介しながら、自然を学ぶ上では観察、記録、調べ、考えるの四つが大切だとし、「自然は身近にどこ

### 「何でも興味持ち観察を」 希少生物 生息環境 保全の重要性説く

ここでもある。何にでも興味を持ってよく観察することが大事」と述べた。性の役割と生殖器の形状が逆転している昆虫「トリカヘチャタテ」の研究で受賞した吉澤准教授は「常識では雄が子にも対して非常に多く投資する一方、雌は多くの場合子育てに協力しないが、この投資関係が逆転した状況では性の役割の力関係も逆転して進化

するに至ったのでは」と解説。トリカヘチャタテの雌は積極的に交尾を繰り返すという「目的は繁殖以外にもあると考えられ、厳しい環境下で生きているために精子の栄養分と水分を

(体内にある)卵の成熟に使っているのでは」とし、貴重な昆虫の生息環境が人間の開発によって壊されているとし「(環境破壊によって)知らないうちに消えていく昆虫の中に発見が隠れているかもしれない。そうした観点からも素晴らしい自然環境を保全することにつなげたい」と、白神山地にも通じる見解を示した。

弘前大農学生命科学部附属白神自然環境研究センター長の中村剛之教授も講演し「白神山地は神秘性と奥深さを持っている。より深くその価値を理解するためには、専門ガイドの利用や観察会に参加することを勧める。センターとしても自然との新しい付き合い方を提案していきたい」と述べた。

この画像は、当該ページに限って”陸奥新報”の記事利用を許諾したものです。転載ならびにページへのリンクは固くお断りします。